しまなみを越えて

写真は2000年6月に発行された「渡辺義晴先生追悼遺稿集」。信州松本の学生時代に思いを馳せるとき、この本を手にする。表紙の信州大学「県の森キャンパス(旧制松本高校)」講堂と会議室が懐かしい。

残念ながら私は寄稿していないが、多くの友人や先輩、先生、さらに自治体関係者や労働組合、生協をはじめ住民団体の人たちの追悼文が掲載されている。渡辺先生が長野県などでいかに幅広く活動されてきたかを示している。

私も渡辺義晴先生には、大変お世話になった。先生のご自宅で開かれていた「資本論をドイツ語で読む会」に途中から参加させてもらった。卒業後の進路で悩んでいたとき、先生の励ましとアドバイスにより、大学院進学を決意した。こうして何とか研究者の道を歩んできたのも、渡辺先生のおかげである。

追悼集のなかで、先輩の聞間元さん(医学部)が次のように述べている。抜粋して紹介する。「いま振り返って、この松本で青年期のスタートをした私たちにとって本当に幸運だったことの１つは、渡辺義晴という魅力溢れる哲学の教師を共有できたことでした。先生はその風貌が影響してか学生にとって決して取っ付きやすい教師ではありませんでしたが、しかしひとたび先生の前に身を置くならば、だれもが先生の話に引き込まれていったのです。どんな内容でも先生は興味深かそうにじっと耳を傾けてくれました。そこでは教師と学生の間に何の分け隔てもなく、未熟な私たちを一個の自立した人間として限りなく尊重してくれたのです。」

自治体関係者のなかで、吉川徹さんが「やさしさと鋭い指摘～望月町政を担当して」を寄稿している。

「地域住民大学発足以来、先生はずっと学長としてその運営や学習内容を支えてくださり、いつも私たちを見つめてくださいました。先生の前では気がつくといつも、自分の事地域の事などほとんど一方的にしゃべっていました。それを先生は、ニコニコと相づちを打ち、時にはノートをとりながらじっと聞いてくださり、合間には質問もなさり、また自分の方がしゃべり続けるといった事になるのでした。しかし時には鋭い指摘もあり、それを後になって気がついて、一人赤面する事もありました。自分の勉強不足やいい加減さを思うのですが、またお会いすると、私の方が何倍もしゃべってしまうのでした。人間への尽きない興味、深い関心をお持ちだったのだと思います。」

先生の葬儀から１年後の夏に選挙を経験し、望月町長になり、「先生からの鋭い指摘を背中に感じながら、政治の世界に足を踏み入れました」と述べて、町政の取り組みを具体的に紹介している。吉川さんについては、またレポートしたい。

(2023年3月25日)